

デイケアの治療構造を通じて、就労まで至った一症例 ～障害受容の過程を考える～

徳永 謙一

医療法人 社団 三愛会 三船病院

Key Word：精神科デイケア 障害受容 就労

【はじめに】

統合失調症を呈した男性で、措置入院を経て退院後にデイケアの導入が開始となるも、自身の過去と現在を比べる中で喪失感や諦めが影響してデイケアの利用継続が危ぶまれていた。だが、作業療法士（以下 OTR）とのかかわりやデイケアの治療構造を本人の状態に応じて変化させていくことで、就労継続支援 B 型事業所（以下 B 型事業所）を利用するまでに至ることができた。その症例の障害受容の過程を、考察を加えて報告する。尚、今回の報告において症例に報告趣旨を説明し同意を得た。

【症例紹介】

30代男性、統合失調症、高校卒業後、製造業などの勤務経験あり。20代後半、女性へのストーカー行為や家庭内暴力が原因で、当院へ措置入院となる。入院後、抗精神病薬の投与や外部からの刺激を調整することで行動化は減少していったため、試験外出外泊を経て退院となった。退院後の日中活動の場としてデイケアを利用。退院時の症状は、陰性症状、感情鈍麻が主である。

【経過】

第Ⅰ期（デイケア利用開始～6ヶ月）退院前よりデイケアの体験参加を経て、退院後は週2回の利用開始となる。利用開始頃は、スタッフに誘われる形でプログラムに参加するが、活動性や自主性は低く、他の利用者との交流も乏しかった。さらには、徐々にデイケアを休もうとしたり、プログラムの不参加を決め込んだりが目立ち始める。この時期は、病気の先行きに不安を感じ、過去の自分と比べる形で今の自分に困惑している（意欲が湧かない、何にも興味もてない、変化がない）発言が聞かれていた。しかしながら、緩やかな病状回復を認めていたので、OTR が常に肯定的なフィードバックを継続し、デイケアの利用を支援し続けた。第Ⅱ期（7ヶ月～12ヶ月）この時期からは、週2回の利用も安定し、「外出はした方が良い」との発言も聞かれていた。同時に、毎月の『目標プログラム・プログラム作成』にて、前月の振り返りと今月の目標を設定し、毎月スモールステップでの目標達成を継続していた。また、興味のあるスポーツ選手の急死ニュースから「死んだりするよりは今回の（自分の病気）はましなのかな」との発言も聞かれ障害受容の進む様子が窺えている。そして、漠然としながらも就労を意識し始め、就労支援グループへ体験参加しつつ、デイケアの利用も週3回、週4回へと増えていった。第Ⅲ期（13ヶ月～20ヶ月）この時期からは、正式に就労支援グループに参加し、利用開始頃に見られたプログラムへの不参加もなく、受身的な面はありながらも、主体性をもった言動が増えてきた。さらには、毎月の振り返りでも、就労を意識した自動車運転の再開や、体力づくりなどに取り組み、目標の達成を継続できていること、デイケア利用の感想を尋ねると、「自分は（継続する事が）できているから続けたい」と、前向きな返答もあり。就労に関しては、「段階を経て一般就労を目指したい」との発言もあり、手始めに B 型事業所の利用を検討することになる。そして、B 型事業所の見学や体験参加を経て正式利用開始となった。

【考察】

障害の受容過程は「ショック期・否定期・混乱期・解決への努力期・受容期」を経て、障害を克服していくと一般的に知られている。経過の第Ⅰ期は、ショック期・否定期・混乱期に該当し、過去の自分を照らし合わせる形で「元に戻っていない」と今の自分を否定的に捉え、喪失感や不安感を大きく抱えていた事が影響し、デイケアの利用継続が危ぶまれたと考える。次の第Ⅱ期は、「解決への努力期」に該当し、デイケア利用の習慣化と、治癒構造を活かした関わり（集団を活用したスモールステップでの目標設定と達成の見える化）の継続にて、個人的原因帰属が高まり障害受容が進んだと考える。そして第Ⅲ期は、「受容期」に該当し、集団グループの移行による所属意識と環境変化が影響し、症例の興味関心と価値の高まりから主体的な言動が増えた事で就労へ繋がったと考える。経過の中で、症例は「（自分の）変化が無い」との発言が多々聞かれていたが、OTR がその不安を傾聴・共感しつつ、受身的で背中を押されながらの状況をも肯定的に捉え、「できている・変化をしている」事を常にフィードバックし続けた。そして、プログラムを通じた目標達成や集団グループの活用も相まって、症例の障害受容が進み、現在と未来へ目を向けられる主体的な行動変容へ繋がったと考える。